

## 第四章 浮舟と匂宮の物語 匂宮と浮舟、橋の小島の和歌を詠み交す

[第一段 二月十日、宮中の詩会催される]

如月の十日のほどに(二月の十日に)、内裏に\*文作らせたまふとて(帝が御所で漢詩会を催しなさるといふこと)、この宮も大将も参りあひたまへり(兵部卿宮も源大将も共に参内なさいました)。 \*「ふみつくり」は<漢詩を作ること>と古語辞典にある。

折に合ひたる物の調べどもに(場に相応しい管弦の調べに乗せて)、宮の御声はいとめでたくて(兵部卿の歌声はとても朗らかで)、「\*梅が枝」など謡ひたまふ(催馬楽の梅が枝を謡いなさいます)。 \*「梅が枝(むめがえ)」は第32巻の題名にも掲げられている催馬楽で、歌詞は「むめがえに(梅が枝に)きみるうぐひすや(来居る鶯や)はるかけて(春掛けて)はれはるかけて(ハレ春掛けて)なけどもいまだや(鳴けども未だや)ゆきはふりつつ(雪は降りつつ)あはれ(アハレ)そこよしや(ソコヨシヤ)ゆきはふりつつ(雪は降りつつ)」と日本古典文学全集25にある。なお、「梅」を<ムメ>と発音するのは平安時代になってからである。>との注記もある。「梅」は元々は<メ>だったらしい。現代語の発音表記は<ウメ>だ。「アハレソコヨシヤ」は<イヤ何とも好い風情じゃないか>みたいな語感だろうか。何かの暗号文だとかいう小話が作れそうな気もするが、この場に相応しい歌だと皆が納得していたのなら、素直な早春賦なのだろう。

何ごとも人よりはこよなうまさりたまへる御さまにて(このように兵部卿は何でも人にとっても秀でていらっしゃる御中心人物ぶり)、すずろなること思し焦らるるのみなむ(奔放な恋愛癖でいらっしゃるだけで)、罪深かりける(罪深かったのです)。

雪にはかに降り乱れ(雪が急に大降りになって)、風など烈しければ(風が激しく戸を打ち付けたので)、御遊びとくやみぬ(御宴会は早く終わりました)。この宮の御宿直所に(兵部卿の御控室に)、人びと参りたまふ(高官たちは集りなさいます)。もの参りなどして(其処で食事を取って)、うち休みたまへり(のんびりなさいました)。

大将、人にもものたまはむとて、すこし端近く出でたまへるに(大将は従者に言付けをなさろうとして少し縁側近くに出ていらっしゃると)、雪のやうやう積もるが、星の光におぼおぼしきを(雪が相当積もっていそうなのは星の光でははっきり見えないが)、「\*闇はあやなし(古今集の歌ではないが、そんな暗さも意味がない)」とおぼゆる匂ひありさまにて(と思えるほどに本人ははっきりそれと分かる芳香を放ちながら)、 \*「闇はあやなし」は注に<明融臨模本、朱合点、付箋「春のよのやみはあやなし梅のはな色こそみえね香やはかくるる」(古今集春上、四一、凡河内躬恒)を指摘。>とある。

「\*衣片敷き今宵もや(ころもかたしきこよひもや)」 \*注に<『源氏積』、明融臨模本、朱合点、付箋「さむしろに衣かたしき今夜もやわれを待らんうちの橋姫」(古今集恋四、六八九、読人しらず)を指摘。>とある。「片敷く(かたしく)」は<[動力四]《昔、男女が共寝をするときには、互いの衣服を敷き交わして寝たことに対していう》自分の衣服だけを敷いて、独り寂しく寝る。>と大辞泉にある。だから、この引歌の歌筋は<小さくて粗末な寝床に独り寝して今夜も私を待つか宇治の橋姫は>みたいなことになりそうだが、この「宇治の橋姫」が何を指すのかが不明で、歌意が特定出来ていない、というのが実情らしい。しかし、古今集に採用されていて、とにかく有名な歌ではあるらしい。で、不明なままでは何とも落ち着かないので、自分なりにオチを付けてみたい。

この歌が言う「宇治の橋姫」は何を指すか。それは宇治橋の「三の間」にあったらしい橋姫神社の祠だ、と決め付ける。ただ、橋姫神社の縁起由来では<646年（大化2年）宇治橋を架けられた際に、上流の櫻谷（桜谷）と呼ばれた地に祀られていた瀬織津媛を祀ったのが始まりとある。当初は橋の守護と管理を任されていた放生院常光寺（通称「橋寺」）敷地内で橋の中ほどに張り出して造営された「三の間」に祀られたが、その後宇治橋の西詰に祀られていた。1870年（明治3年）の洪水による流出後、1906年（明治39年）10月現在の場所に移された。>（ウィキペディア）とされていて、「三の間」に瀬織津媛（せおりつひめ）が祀られていたらしい話はあるが、確かな文献資料としては戦国時代の16世紀に武将が茶会用の水を汲み取った場所と記されていて、本来の用途は不明らしく、祭祀場説は伝承の内になりそうだ。が、宇治橋は設置当初では無類の長橋だったようだし、通行の無事を祈りたくなる危険な橋だったことは大いに考えられるので、橋も祠も簡素なものだったにせよ、いや、簡素だったからこそ、私は在ったと信じたい。で、この歌は京の男が詠んだのだろうから、もはや宇治や橋姫の具体事情は離れて、少し無理をしてでも可愛い女に会いに行くか、みたいな遊び気分を示していて、多くの男が、それに多分、多くの商売女も同調して景気付けに口ずさんだ、と考えるのが楽しい。だから、歌意は左様に解して置く。ところで、この引歌は橋姫巻三章での、薫君が19歳から宇治通いを始めて三年過ぎた、そして今からは六年前になる、まだ中将だった22歳の晩秋に宇治を訪ねた際に、八宮は山籠もりしていて留守で、その時に初めて薫君は姫君たちを垣間見ることになり、姉君と対面し歌も贈答したという記念すべき場面で、別れ際に薫君が姉君へ歌った「橋姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる」（和歌45-10）という口説き文句にも下敷きにされていた印象深い歌だ。が、その場面は同時に、姫君に先立って応対に出て来た<弁>の初登場にもなっていて、次の訪問で薫君は遂に弁から出生の秘密を明かされる、という重い展開となっていて、橋姫巻全体の印象が姫との出会いの楽しさよりも出生事情の重たさに傾きがちで、ついこの出会い場面が小さく見えるが、作者は当初からこの二人の出会いを運命的なものとして位置付けて、出生事情と抱き合わせる為に三年間も出会わないまま薫君を宇治へ通わせて、各要素が上手く馴染む熟成期間を設けて寝かせていたらしい。いや、それも実相の巧みさに習ったものではありそうだが。

と、うち誦じたまへるも（と朗誦なさったのも）、\*はかなきことを口ずさびにのたまへるも（宇治姫を恋しがると和歌を何気なく呟きなさったのだが）、あやしくあはれなるけしき添へる人ざまにて（妙に風情が漂う人柄の所為か）、いともの深げなり（とても意味有り気です）。 \*「はかなきこと」は注に<『集成』は「漢詩に対して、和歌を「はかなきこと」という」と注す。>とある。

言しもこそあれ（別に雪に因むでも無いのに、宇治の橋姫を言うとは、大将はよほど常陸姫が気懸かりらしいな）、宮は寝たるやうにて（と匂宮は寝ているような振りをして）、御心騒ぐ（その実は胸騒ぎがします）。

「おろかには思はぬなめりかし（大将は姫を軽く見てはいないらしい）。片敷く袖を（姫の寂しい独り寝を）、我のみ思ひやる心地しつるを（私だけが案じている心算だったが）、同じ心なるもあはれなり（大将も同じとは意外だ）。侘しくもあるかな（ちょっと問題かな）。かばかりなる本つ人をおきて（こういう本気の人を差し置いて）、我が方にまさる思ひは（此方に姫の好意を向けさせるのは）、いかでつくべきぞ（容易ではなさそうだ）」

とねたう思さる（と宮は大将を妬ましくお思いになります）。 \*「ねたし」は<「名痛し（ないたし）」の約。相手の高名が辛く感じられる語感。>とのように古語辞典には説明がある。多くは<憎らしく思う。癩に障る。>という語用らしいが、此处では大将に引け目を覚えた<妬ましい>気持だろう。ただ、引け目を覚えると言っても、自責の念は皆無らしい。悔しさは情熱が満たされない不満だから、宮には純粋な真心があるとは言えるの

かも知れない。が、姫の苦悩を思えば、あまりにも分別に欠けるようにも見える。叔父がそれなりに手当てして困っている女を寝取って、簡単には思うように事が運びそうも無いから叔父は邪魔だ、というのは、とても責任ある大人の行動や考え方とは思えない。兵部卿宮は既に 29 歳だし、妻子も居る身だ。尤も、此処で反省されては詰まらない、とも読者としては思うが。

明朝(つとめて)、雪のいと高う積もりたるに(雪がとても高く積もっていたが)、\*文たてまつりたまはむとて(昨日中断した漢詩文を作って、帝に献上なさるということで)、御前に参りたまへる御容貌(御座所に参上なさる兵部卿の御姿は)、このころいみじく盛りにきよげなり(最近殊に男盛りで颯爽としています)。\*「ふみたてまつる」は注に<昨夜賜った詩題について作った漢詩。帝の御前に献上する。>とある。

\*かの君も同じほどにて(大将殿も同じく男盛りで)、\*今二つ、三つまさるけぢめにや(宮よりは二、三歳年上らしい態度の所為か)、すこしねびまさるけしき用意などぞ(少し重々しい作法やものの言い方などを)、ことさらにも作りたらむ(特に意識して)、あてなる男の本にしつべくものしたまふ(上品な男の見本になるようにしていらっしゃいます)。「帝の御婿にて飽かぬことなし(帝の御婿殿に不足は無い)」とぞ、世人もことわりける(と宮廷の内外でも納得しています)。\*才なども(詩文の才能も)、おほやけおほやけしき方も(政治向きの才能も)、後れずぞおはすべき(大将は誰にも引けを取りなさないだろう)。\*「かの君」は薫大将。\*「今二つ、三つまさるけぢめにや、すこしねびまさる」は注に<『集成』は「実は、薫は匂宮より年下のはず。匂宮誕生は、源氏四十七歳以前。薫は、源氏四十八歳の時の子である。老成した薫の人物像を強調しようとしてわざとこうしたのであろう」。『完訳』は「薫の老成のイメージを強調するために不用意に誤ったか」と注す。>とある。今まででも紫の上の年齢が変だったことなどもあって、その時も困ったが、此処でも作者の錯誤は有り得るし、作者がその心算でここら辺の話を構築していると私の景色とはズレル気がして都合が悪い。が、紫の上の年齢違いは晩年のことであり、然程は話の展開に支障は無かったが、此処では、今正に二人の関係性が焦点となっているので、此処で、それもこの一文で、二人の年齢が逆転するのは困る。だから、どうしても今までの設定のまま、ということは匂宮が薫殿より一歳年上ということのまま話が進まない、と落ちて読み進めない。そこで、どうせ今まででも色々強引な言い換えはして来ているので、此処でも何とか辻褃の合う言い方で、ここは遣り過ぎて置きたい。で、「けぢめ」という語だが、これは<区別。違い。>という語用が多いが、現代語では<規範。節度。>という語用の方が主になっているようで、これを<らしい態度>という言い方だとすれば、「まさるけぢめにや」を<年上らしい態度の所為か>と言えなくもなさそうに見える。それに、「ことさらにも作りたらむ」を<特に優れている>ではなく<特に気をつけている>と言ってしまうと、収まりも着く。因みに私見では、この年で薫殿 28 歳、匂宮 29 歳、ついでに、常陸姫 22 歳、対の御方 28 歳、匂宮正室源氏姫 24 歳、薫殿正室女二の宮 17 歳、源右大臣 54 歳、帝 49 歳、明石中宮 47 歳、といったところ。\*「才(ざえ)」は<学問、特に漢学。学才。>と古語辞典にある。此処では文脈からして<詩文の才能>のことらしい。

文講じ果てて(詩文の披講が終わって)、皆人まかでたまふ(参会者は皆退出なさいます)。宮の御文を(総評では兵部卿宮の詩文が)、「すぐれたり」と誦じののしれど(優秀作だと朗誦し褒め称えたが)、何とも聞き入れたまはず(宮は別に何とも思いなさらず)、「いかなる心地にて(どんな心算で)、かかることをもし出づらむ(こんな美辞麗句を並べ立てたのか)」と、そらにのみ思ほしほれたり(と大将と姫の仲が気になる宮は、空々しい気持になりなさるばかりでした)。

[第二段 匂宮、雪の山道の宇治へ行く]

かの人の御けしきにも(兵部卿は大将が常陸姫を恋しがる御様子にも)、いとど驚かれたまひければ(姫を得損なうかと非常に危惧なさって)、あさましうたばかりておはしましたり(浅はかな仮病を偽って宇治にお出掛けなさいました)。京には、\*友待つばかり消え残りたる雪(京では融け掛かりながらも残っている程度の雪が)、山深く入るままに(山深く進むほどに)、やや降り埋づみたり(だんだん厚く降り積もっていました)。\*「友待つ雪」は、先に降って後から降る雪を待っている雪、のこらしいが、それなら降り積もった雪は全て「友待つ雪」になりそうだ。が、違うらしい。「待つ」は、ただ留まっていることではなく、何かを期待して成果を望んでいる状態を言うので、「友待つ雪」は<次の雪が早く降ってこないと消えてしまう雪→解け掛かっている雪→辛うじて白さの残る雪>を言うようだ。

常よりもわりなきまれの細道を分けたまふほど(いつもより難儀な人影も稀な細い山道を兵部卿が分け入るなさを)、御供の人も、泣きぬばかり恐ろしう(御供の人も泣いてしまうほど恐ろしいことと)、わづらはしきことをさへ思ふ(不測の事態の懸念を思います)。しるべの内記は(案内役の内記は)、\*式部少輔なむ掛けたりける(式部少輔を兼務していました)。いづ方もいづ方も(どちらの官職も)、ことごとしかるべき官ながら(権威ある司でありながら)、いとつきづきしく(すっかり宮の従者に馴染んで)、引き上げなどしたる姿もをかしかりけり(裾をたくし上げて立ち働く姿も愛嬌ものでした)。\*「式部少輔」は「しきぶのせう」と読みがある。「少輔」は「せうふ」で「輔(ふ)」こそが次官(すけ)である事を示しているが、発音上は「せう」も「せふ」も<しょう>なので、慣習上省字されたらしい。で、「少輔」は各省の次官の内「大輔(たいふ)」の副官に当たる役職で、古語辞典には「式部少輔」は<献策・省試などを司る。>とある。有職故事に通じた知識人・学者が就く官職のようだ。

\*かしこには(山荘の方では)、おはせむとありつれど(兵部卿がいらっしゃるという知らせはあったが)、「かかる雪には(この雪では、今日のお越しはない)」とうちとけたるに(と気の緩んでいた所に)、夜更けて右近に消息したり(夜更けて右近に従者が宮の御来訪を告げました)。「あさましう(まさかこの雪山を)、あはれ(ああ、それほどに)」と、君も思へり(と姫君も感じ入りました)。右近は、いかになり果てたまふべき御ありさまにかと(右近は何かあったら如何する御心算かと)、かつは苦しけれど(一方では案じられたが)、今宵はつつましさも忘れぬべし(今宵は感激のあまり、人払い工作も忘れてしまったようです)。\*言ひ返さむ方もなければ(出て来た女房たちを今さら下がるさせる方便も無いので)、同じやうに睦ましくおぼいたる\*若き人の(その中の姫が右近同様に親しんでいると思われる若女房の)、心ざまも奥なからぬを語らひて(気遣いも利きそうな者に訳を話して)、\*「かしこには、おはせむとありつれど、かかる雪にはとうちとけたる」は、このまま現代語でも普通に日常的な言い方として使われている会話文に非常に近いような気がする。それだけに、本当にそういう意味なのかと妙に疑わしく感じる、という面さえある。\*「言ひ返さむ方」は右近が他の女房たちの接客を<断る言い訳>なのだろう。\*「若き人」とは、後文からして<侍従>らしい

「いみじくわりなきこと(兵部卿の御訪問は、とても困ったことですが)。同じ心に(姫の身になって)、もて隠したまへ(隠し通して下さい)」

と言ひてけり(と右近は言いました)。もろともに入れたてまつる(そして、一緒に宮を姫の御部屋にお入れ申し上げます)。道のほどに濡れたまへる香の、所狭う匂ふも(道中で濡れなされた

衣服の焚き香が所狭しと匂うのも)、もてわづらひぬべけれど(隠し切れませんが)、かの人御はひに似せてなむ(大将の御様子に似せて)、もて紛らはしける(誤魔化しました)。

[第三段 宮と浮舟、橘の小島の和歌を詠み交す]

夜のほどにて立ち帰りたまはむも(兵部卿は此処まで遣って来て、このまま夜の内に立ち帰り為さるのは)、なかなかなべければ(中途半端になってしまうし)、ここの人目もいとつつましさに(この山荘の人目も避けたいので)、時方にたばからせたまひて(時方に計略させ為さって)、「川より遠方なる人の家に率ておはせむ(川向こうの離れた人の家に姫をお連れ申そう)」と構へたりければ(と予定していたので)、先立てて遣はしたりける(先方に時方を事前に遣わしていらっしやっただのが)、夜更くるほどに参れり(深夜になって参上しました)。

「いとよく用意してさぶらふ(用意が出来て居ります)」

と申さず(と時方は右近から宮に申させます)。「こは、いかにしたまふことにか(これは何をなさる御心算なのか)」と、右近もいと心あわたたしければ(と右近もとても不安なので)、寝おびれて起きたる心地も(悪夢に寝覚めて起きたように)、わななかかれて(震えが抑えられず)、あやし(気が気でない)。童への雪遊びしたるけはひのやうにぞ(子供が雪遊びした時のように)、震ひ上がりける(大きく震え上がっていました)。

「いかでか(どうするのですか)」

なども言ひあへさせたまはず(などとも姫に言う隙も与えず)、かき抱きて出でたまひぬ(兵部卿は姫を掻き抱いて外へ出なさいました)。右近はこの後見にとまりて(右近は此処の後始末に留まって)、\*侍従をぞたてまつる(侍従を姫に添わせ申し上げます)。\*「侍従」と此処に、しかし唐突に明示される。この若女房は元気一杯の印象があって、その登場は幾分華やかで何処か嬉しい。が、こういう語り口にはどうにも馴染めない。

いとはかなげなるものと(実に頼りないものと)、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて(毎日見遣っていた小さな舟にお乗りになって)、さし渡りたまふほど(向こう岸に差し渡りなされる時に)、遥かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて(姫は遥か遠い所まで漕ぎ離れて行くような心細さを覚えて)、つとつきて抱かれたるも(宮にぴったりと付いて抱かれているのも)、いとらうたしと思す(宮はとても可愛らしく思います)。

\*有明の月澄み昇りて、水の面も曇りなきに、\*「有明の月」は注に<『集成』は「陰暦二十日以後の月で、夜半に出る。これによれば、匂宮の宇治来訪は、宮中詩宴(二月十日頃)の十日ほど後となる」と注す。>とある。とても丁寧な指摘で助かる。

「\*これなむ、橘の小島(これなんか、橘の小島でしょうか)」\*注に<船頭の詞。『河海抄』は「今もかも咲き匂ふらむ橘の小島の崎の山吹の花」(古今集春下、一二一、読人しらず)を指摘。>とある。船頭、と言っても、まさか此処に事情を知らない余所者の居る筈もなく、こういう軽口を叩くのは時方だろう。で、この歌は古今集に採用されて、春の風情の代表的なものとして広く知られていたらしいが、「橘の小島」が此処で言う宇治

川の中洲のことなのかどうかは不明らしい。というか、此处で指し示されている「小島」は「大きやかなる岩のさまして、されたる常磐木の蔭茂れり」と語られていて、せいぜい大きな岩程度の大きさで、松の数本が生えている面白さだったらしく、とても天下に知られた名所、という描写ではない。だから、この「これなむ橘の小島」は＜どうです、これなんか橘の小島ってトコでしょうか＞くらいの言い方だろう。引き歌の筋は＜今でも咲き賑わっているだろうか、立ち離れになった少し馴染みの色町の女が着ていた山吹色の印半纏は＞という遊び符牒で読むべきもので、「崎」は「先(先導＝目印)」で、それが「咲き」に音で掛かるところが浮かれ気分によく似合う、みたいな大喜利なんじゃないかな。でなきゃ、何でこの歌が春の風情の代表歌なのか、私には分からない。

と申して(と舟を漕ぐ時方が申して)、御舟しばしさしとどめたるを見たまへば(近くに棹を差して舟を止めた先を宮が御覧になると)、大きやかなる岩のさまして(大きな岩くらいの形で)、されたる\*常磐木の蔭茂れり(風情ある松の木陰に草が茂っていました)。\*「常磐木(ときはぎ)」は＜常緑樹＞を言うらしく、私は松を思い浮かべる。

「かれ見たまへ(あれを御覧よ)。いとほかなけれど(こんな所に根を張る松は、大きくなれば土台を崩すというはかない定めだが)、千年も経べき緑の深さを(葉は千年も生きそうな緑の力強さだ)」

とのたまひて(と兵部卿は仰って)、

「年経とも変はらむものか、橘の小島の崎に契る心は」(和歌 51-08)

「この松に 変わらぬ愛を 誓います」(意識 51-08)

\*「橘の小島」の語用は、時方がつい今しがた左様に例えたから＜この近くの岩を指す＞ということで、この岩が＜世に名高い「橘の小島」だ＞ということではないのだろう。「崎に契る」は＜先に誓う→将来を誓う→此处を記念の場所として将来を誓う＞くらいの言い方だろうか。で、歌意は＜この松が此处に緑を蓄える限り私の愛も変わらないと約束する＞ということになるのだろう。こういう記念碑物の歌詠みはどんなに在り来たりでも、当人同士さえ恋人気分なら見事に成立する、というものらしい。ただ、「たちばなのこじま」という言い方には＜立ち離れた少し馴染みの女＞という遊び符牒はあるだろうから、姫にとっては別の響きに聞こえないと恋人気分が打ち壊しになりそうだ。と言っても、言葉遊びとして「はな」の開く語感を地味に取るような別の解釈をするのは難しそうで、むしろ「橘」を柑橘果実の黄色と葉の緑の象徴と見て、この日の姫の服が緑の内着に橙色の上着で、古歌に「小島の崎の山吹の花」とあるように山吹色の掛布を羽織っていた、とすれば、正に姫本人が「橘の小島の崎」となって、「契る心は」が＜あなたを愛す＞という意味に聞こえそうだ。時方は、この日の姫の衣装と偶々見つけたこの小島との取り合わせに、古今集の歌を思い出して、瞬時に此处までの展開を読んだ、に違いない。で、宮も当然その時方の気遣いに気付いたし、姫も素直に受け止めた、と見るのが幸せな観劇方法のように思える。が、如何にも気の利いた時方の機転ではあっても、古歌に習う話運びである以上、「橘の小島」に＜立ち離れた少し馴染みの女＞という語意があることは拭えないようにも見えて、作者に不穏な種が意図された印象はある。

女も(姫も女心に)、めづらしからむ道のやうにおぼえて(是が楽しい道行のように思えて)、

「橘の小島の色は変はらじを、この浮舟ぞ行方知られぬ」(和歌 51-09)

「浮舟は 小島に泊まる こともない」(意識 51-09)

\*注に<浮舟の返歌。「橘の小島」「変はる」の語句を受けて返す。>とある。此処に初めて「浮舟」の語句が用いられ、この句を詠んだ事から常陸姫を<浮舟>と通称し、この巻題にも掲げられているのだろう。したがって、此処より前に常陸姫を<浮舟>と名称語用する注釈は本当に見苦しい。さて、姫自身が「橘の小島」の語句を返したということは、この語用を受け入れた、という事を示している。やはり、「橘の小島」という言い方を姫自身のことと受け止めたからこそこの受け入れなのだろう。そして、それはやはりこの日の姫の衣装が花橘の重ね着に山吹色の上掛けだったからなのだろう。そう思えば、「色は変はらじを」が<確かに自分の服の色合いは「橘の小島」と同じだが>という言い方になって、宮への返歌としての<松の緑が変わらないとしても>との複意に見做せる。

折から(この奇抜な展開と)、人のさまに(姫の可憐さに)、をかしくのみ何事も思しなす(兵部卿は今の全てが非常に興味深いとお思いになります)。

かの岸にさし着きて降りたまふに(向かい岸に漕ぎ着けて舟をお降りなさるのに)、人に抱かせたまはむは(姫を人に抱かせ為さるのは)、いと心苦しければ(まことに不本意なので)、抱きたまひて(兵部卿ご自身がお抱きになって)、助けられつつ入りたまふを(介助を受けながら目当ての邸にお入りになるのを)、いと見苦しく(供人たちは、何と畏れ多い分不相応なお振る舞いかと、実に見るに堪えず)、「何人を(どれほどの貴人を)、かくもて騒ぎたまふらむ(宮様は斯くも大事に為さるのか)」と見たてまつる(と押し申します)。

時方が叔父の因幡守なるが領する荘に(その邸は、時方の叔父の因幡の守という者が所有する荘園内に)、はかなう造りたる家なりけり(簡素に造った家なのでした)。まだいと粗々しきに(まだだいぶ粗造りで)、網代屏風など(間仕切りも粗末な網代屏風など)、御覧じも知らぬしつらひにて(兵部卿が見知りなさらない田舎風の部屋で)、風もことに障らず(風もしっかりとは遮らず)、垣のもとに雪むら消えつつ(垣根の下に溜まった雪がまだらに消え掛かるところに)、今もかき曇りて降る(今も空は掻き曇って雪が降る寒々しさです)。

[第四段 句宮、浮舟に心奪われる]

日さし出でて(やがて日が差し出て来て)、軒の垂氷の光りあひたるに(軒のつららに光が当たると)、\*人の御容貌もまさる心地す(互いの御姿がはっきり見えて来ます)。\*「ひとのおおんかたち」は注に<『集成』は「二人のお顔立ちのお美しさも」。『完訳』は「浮舟の目にする句宮の容姿」と注す。>とある。下文に「宮も」「女も」と続くので、これは兵部卿と常陸姫の二人のことだろう。それも、二人は相對しているのだから、外が明るくなれば、互いの姿がよりはっきりと見えて来るのは当然だ。

宮も(兵部卿も)、所狭き道のほどに(少人数での山道踏破なので)、軽らかなるべきほどの御衣どもなり(身軽な狩衣装束でいらっしやいました)。女も、脱ぎすべさせたまひてしかば(女も宮が上着を脱ぎ滑らせなさっていたので)、細やかなる姿つき、いとをかしげなり(細身の身体つきがとても風情があります)。ひきつくろふこともなくうちとけたるさまを(身繕いもせずに内着姿でいるのを)、「いと恥づかしく(とても恥づかしく)、まばゆきまできよらなる人にさしむかひたるよ(直視出来ないほど立派な人と差し向かいで居るものだ)」と思へど(と姫は思ったが)、紛れむ方もなし(隠れようもありません)。

なつかしきほどなる白き限りを五つばかり(柔らかそうな白い着物ばかりを五枚ほど重ね着している姫は)、袖口、裾のほどまでなまめかしく(袖口や裾のあたりが色っぽく)、色々にあまた重ねたらむよりも(色々と多く重ね着しているよりも)、をかしう着なしたり(見応えのある着こなしてました)。常に見たまふ人とても(いつもお会いになる源氏六姫や対の御方でさえ)、かくまでうちとけたる姿などは見ならひたまはぬを(ここまで簡素にしている姿は見慣れていらっしや何ので)、かかるさへぞ(こういう姫の姿までが)、なほめづらかにをかしう思されける(さらに珍しく心楽しく宮には思われなさいます)。

侍従も、いとめやすき若人なりけり(侍従もとても器量の良い若女房でした)。「これさへ(侍従までが)、かかるを残りなう見るよ(兵部卿との仲を知ってしまった)」と、女君は、いみじと思ふ(と姫は自身の女の性を極まり悪く思います)。宮も(宮も侍従に)、

「これはまた誰そ(あなたは何と言う女房か)。わが名漏らすなよ(私のことは他言するなよ)」

と口がためたまふを(と言って口封じ為さるのを)、「いとめでたし(とても立派な貴人だ)」と思ひきこえたり(と侍従は思い申します)。ここの宿守にて住みける者(此処の管理人として住んでいる男は)、時方を主と思ひてかしづきありけば(時方を主人と違って平伏しているので)、このおはします\*遣戸を隔てて(兵部卿たちがいらっしやる部屋と引戸一枚隔てた隣室に)、所得顔に居たり(時方は得意顔で座していました)。声ひきしじめ(声を引き締めて)、かしこまりて物語しをるを(畏まって話す宿守を)、いらへもえせず(時方は返事もせず)、をかしと思ひけり(面白がっていました)。\*「遣戸(やりど)」は<引戸>と古語辞典にある。襖障子よりは簡素な戸板造りを言うのだろうか。

「いと恐ろしく占ひたる物忌により(とても恐ろしい祟りがあると占いのあった厄払いの物忌みで)、京の内をさへ去りて慎むなり(京の内まで避けて此処で謹慎している)。他の人、寄すな(他の者を近付けるな)」

と言ひたり(と時方は宿守に言っていました)。

[第五段 匂宮、浮舟と一日を過ごす]

人目も絶えて(人目の無いこの家で)、心やすく語らひ暮らしたまふ(宮は姫と気楽に話して一日を過ごしなさいます)。「かの人のもしたまへりけむに(大将が宇治にいらっしやった時に)、かくて見えてむかし(姫はこのように親しく会ったのだろう)」と、思しやりて(と思ひ遣って)、いみじく怨みたまふ(兵部卿は非常に嫉妬なさいます)。二の宮をいとやむごとなくて(そこで何とか姫の大將への気を逸らそうと、薫大將が女二の宮をととても敬って)、持ちたてまつりたまへるありさまなども語りたまふ(大事になさっている様子なども三の宮は姫にお話しなさいます)。かの耳とどめたまひし一言は(そして先だつての御前詩会の時に、大将が姫を大事に思っていると呟きなさった橋姫の歌を、耳に留めなさったことは)、のたまひ出でぬぞ憎きや(仰らないという狡さです)。



時方、御手水、御くだものなど、取り次ぎて参るを御覧じて(時方が洗面水や御果物などを下働きの者から取り次いで部屋に差し入れて来るのを兵部卿は御覧になって)、

「いみじく\*かしづかるめる\*客人の主(非常に丁寧な扱いを受けているらしいお客様)、さてな\*見えそや(そんな給仕姿を人に見せなさんなよ)」 \*「かしづかる」は「かしづく(大事に持て成す)」の未然形「かしづか」に受動の助動詞「る」が付いたく大事に世話されている>という受身表現。 \*「まらうとのぬし」は<客人のあなた様>という揶揄口調らしい。 \*「見ゆ」は<見える。見られる。思われる。>という語用もあるが、<見せる。示す。>でもある。「ゆ」は事態の推移を示す語意だろうか。「行く」の「ゆ」も同源かもしれないが、現代語の語用とは違うので微妙な語感だ。

と戒めたまふ(と御注意なさいます)。侍従、色めかしき若人の心地に(侍従は惚れっぽい若い女心に)、いとをかしと思ひて(時方をととても好ましく思っで)、この大夫とぞ物語して暮らしける(この五位蔵人と仲良く話し合っていました)。

雪の降り積もれるに(雪が降り積もっているこの日に)、かのわが住む方を見やりたまへれば(姫の自宅の山荘がある向こう岸を兵部卿は御覧になると)、霞の絶え絶えに梢ばかり見ゆ(霞の切れ間に木立ばかりが見えます)。山は鏡を懸けたるやうに(山は鏡を掛けたように背後に光を反射させて)、きらきらと夕日に輝きたるに(きらきらと稜線が夕日に輝いていたので)、昨夜、分け来し道のわりなさなど(昨夜分け入って来た山道の険しさなど)、あはれ多う添へて語りたまふ(姫の同情を買おうと、苦労が多かったように誇張してお話しなさいます)。

「峰の雪みぎはの氷踏み分けて、君にぞ惑ふ道は惑はず (和歌 51-10)

「山道に 迷わず迷う 恋の道 (意識 51-10)

\*木幡の里に馬はあれど(馬も頼れぬいばら道)」 \*出典参照に<「山科の木幡の里に馬はあれど徒歩(かち)よりぞ来る君を思へば」(拾遺集雑恋一二四三 柿本人麿)>とある。この言葉を歌に添えた、ということは、この引き歌の「徒歩よりぞ来る君を思へば」をくゆっくり時間をかけて君を大事に思いながら>みたいな口説き文句にしているように見えるが、この「徒歩よりぞ来る君を思へば」の元々の意味は別にあって、是は其を踏まえた上での「君」に掛けた洒落語用なんじゃないのか。この引き歌は「こはた」を語る時に良く持ち出されるが、「君」が本当に妻や女なら、早く会いたいのだから下馬する筈はない。普通、下馬して歩く、と言えば、貴所に憚る礼儀だ。御所や寺社、また墓所の前では下馬する。この引き歌をウェブ検索すると、万葉集 2-148 番の「青旗の(あをはたの)木幡の上を(こはたのうへを)通ふとは(かよふとは)目には見れども(めにはみれども)直に逢はぬかも(ただにあはぬかも)」が関連歌としてヒットする。この万葉集歌は天智天皇の皇后であった倭姫王(やまとのひめみこ)が天皇の危篤または崩御に際して詠んだ歌らしく、また各語に暗号めいた響きも感じられて真意は量りかねるが、天智天皇の御霊が「木幡の上を通ふ」とは読めそうなので、柿本人麻呂が言う「君」は<天智天皇>ではありそうだ。天智天皇の御陵は清水寺の東の山科駅近くだが、没した場所は宇治近い木幡と目されていた、のかもしれない。

など、あやしき硯召し出でて、手習ひたまふ(などと兵部卿は粗末な硯をお使いになって流し書きなさいます)。

「降り乱れみぎはに凍る雪よりも、中空にてぞ我は消ぬべき」(和歌 51-11)

## 「凍らずに 中空の間に 消える雪」(意識 51-11)

\*「中空(なかぞら)」は空中だから、地面に降り付く前に溶けて消えてしまうみぞれ雪のはかなさに姫は自分の頼りない立場を準えて、兵部卿の苦勞など気楽なものだ、と軽口を利いた心算が、その大将と兵部卿との間でどっち付かずに居る「中空」の悩ましさを思わず吐露してしまった、というのがこの歌の作意らしい。「消ぬ」は「けぬ」の読みだが、これは「消ゆ(きゆ、消える)」の連用形「消え」に状態確認の助動詞「ぬ」が付いた「消えぬ」の音便らしい。

と書き\*消ちたり(と返歌を書いて、姫は兵部卿の「みぎはの氷」を否しました)。この「\*中空」をとがめたまふ(すると兵部卿は、姫の言う「中空」を二股の不誠実と詰りなさいます)。「げに(確かに)、憎くも書いてけるかな(厭なことを書いてしまった)」と、恥づかしくて引き破りつ(と姫は恥じて、書いた紙を引き破りました)。さらでだに見るかひある御ありさまを(ただでさえ立派な兵部卿の御姿を)、いよいよあはれにいみじと(いっそう深くしみじみと)、人の心にしめられむと(姫の心に印象付けようと)、尽くしたまふ言の葉(いろいろに口説きなさる宮の言葉)、けしき、\*言はむ方なし(情緒は言うまでも無くいやらしい)。\*「消つ(けつ)」は<消す>だが、現代語でも「消す」は<除く、否定する>と語用する。\*「中空」は注に<『集成』は「匂宮と薫の中に立って迷っているように聞えることを咎める」と注す。>とある。\*「言はむ方なし」と言われては、「尽くしたまふ言の葉けしき」が具体的にどういうものだったのかが分からない。が、此処までの語りからすれば、兵部卿は平気で大将の悪口を言って、その不実を強調しては、自分の誠意を示した、ということではありそう。その実、家庭を持っているのは兵部卿も同じで、いや、むしろ姫は対の御方とは実際に面对もしているし、若君に松飾りを送っても居て、妻としては大将には女二の宮しかいない、という事情にも関わらずだ。それに大体が、大将は兵部卿の叔父であり、女二の宮は腹違いとはいえ妹に当たる縁戚関係だ。が、直情のままに自分を求めてくる兵部卿に、性感が傷付いていない女なら、可愛い愛しい、また遅しい頼りたい、という思いを抱かぬはずもないだろう。その辺の言うに言われぬ男女の彩は<イヤラシイ>と言うのだろう。

### [第六段 匂宮、京へ帰り立つ]

御物忌(この家での兵部卿の謹慎を)、二日とたばかりたまへれば(二日間という事になさっていたので)、心のどかなるままに(ゆっくり一晩共寝して)、かたみにあはれとのみ(互いに愛しいと求め合って)、深く思しまさる(宮の御愛情は深まりなさいます)。

右近は、\*よろづに例の、言ひ紛らはして、御衣などたてまつりたり(右近は何かと例によって、今回の舟渡りも大将の遊びごとと言ひ紛らわして、姫のお着替えなど対岸の家へ届けさせ申し上げました)。\*「よろづに例の」とあるが、対岸の家へ泊まった事など前例は無い。注には<留守居役の右近は周囲の女房に言い繕って、浮舟のもとに着替えを差上げた。>とあるが、どう言い繕ったというのか。いや、この場は偽大将の線で押し通すしかないから、殿の酔狂で対岸の知人宅へ遊びに行った、とでも右近は他の女房や郎党に言ったのだろう。問題は、このくらいの大仕掛けになると、例えこの場は取り繕えたとしても、偽大将の筋でいつまでも隠し果せるはずは無い、ということと、それを右近も覚悟しただろう、ということだ。そんなことを言ったら、今までだって大将にバレて不思議は無かった気もするが、今までは本当に少数の者の目にしか兵部卿は触れなかったかも知れないが、今回は関わった者がどんなに絞っても倍増していそう。それにまあ、いつかはバレることであってみれば、右近は侍従に打ち明けた時点で腹を括ったのかも知れないが、この一文は大将に事が露見する前段階を知らせる言い方に私には聞こえる。

今日は、乱れたる髪すこし\*削らせて(姫は今日は乱れた髪を軽く梳かせて)、\*濃き衣に紅梅の織物など(紫色の内着に紅梅色の上着を)、あはひをかしく着替へて\*みたまへり(色合いも良く着替えていらっしやいました)。侍従も、あやしき\*褶着たりしを(侍従もひだの崩れた腰裳を着けていたのを)、あざやぎたれば(真新しい裳に着替えたが)、\*その裳を取りたまひて(兵部卿はその古い裳を手に取りなさって)、君に着せたまひて(姫君に着けなさって)、御手水参らせたまふ(宮の洗面を手伝わせなさいます)。 \*「けづる」は<櫛で髪をとかす→くしけずる→梳る>という言い方らしく、であれば「削る」という漢字表記は紛らわしい気がするが、「削」という漢字の本義に<髪梳き>があるのだろうか。 \*「濃き衣」は<濃い紫色の着物>の言い方らしい。 \*「みたまへり」と姫に敬語遣いがある。姫は受領家の娘だが、それなりの貴族ではあり、まして今や大将に囲われ、それどころか親王の相手を務める貴女であって、普通に敬語遣いされるべき人物ではあるのだろう。が、大将や兵部卿に対しては、とても夫人格とは見做されず、決して敬語遣いはされていない。この辺の語用は、このような王朝の生活実感に乏しいので、私にはとても神経が使われて難しく、この敬語遣いこそがこの物語の語り口調そのものなので、それは即ち、この物語を読み下すのに本当に難儀している。 \*「褶(しびら)」は<衣服の上から裳(も)のように、腰に巻きつけて着るひざ上までの衣。略儀のもので、主に下級の女房の間に用いられた。>と大辞泉にある。「褶」という漢字の音読みは「シュウ」で、意味は<ひらひらしたひだ>らしい。「風俗博物館」サイトの「日本服飾史資料」編の「平安・民衆婦人姿」に<しびらだつもの>姿の画像があるが、ざっと前掛け・エプロンに近く、実用上もそういう用途なのだろう。 \*「その裳を取りたまひて〜」の文意は注に<『集成』は「(匂宮は) その褶をお取りになって、浮舟に着せられて、宮のご洗面のお世話をおさせになる。身近に世話をさせて玩弄したい気持。女房扱いになる」と注す。>とある。分かり難いのは「みてうづまゐらせたまふ」の敬語遣いだ。「みてうづ」の「御」は丁寧語だから姫に対しても使われるのだろう。だから、この「御手水参る」は<姫が洗面なさる>という事のようにも見える。で、「参らす」の「す」は「たまふ」に付くから、宮が姫に<姫自身の洗面をさせなさる>という使役の助動詞のように見える。が、となると、この「参る」は宮の姫に対する謙讓意となってしまう、その語用は身分上成立しない。宮と姫の関係に於いては、常に姫が謙讓するので、この「参る」は宮が<お使いなる>か、姫が<宮に給仕して差し上げる>という言い方であり、「参らせたまふ」の「たまふ」はその「参る」を使役する宮への敬語なので、宮が姫に<給仕させなさる>という言い方になる、ようだ。ところで、この限りではこの場面は女房ごっこの趣向のようでもあり、実際の貴人の夫婦間でも妻が夫の世話を直接焼くのも普通の日常でもあるだろうが、下文で宮の王家の身分意識が平然と語られるのには、此処に語られている人たちと私との生活感の違いを改めて思い知らされる。

「\*姫宮にこれをたてまつりたらば(姉宮にこの君を仕えさせ申したら)、\*いみじきものにしたまひてむかし(さぞ立派に仕込んで下さるだろう)。いとやむごとなき際の人多かれど(高家出の女房は多く居るが)、かばかりのさましたるは難くや(これほど女房姿が似合う女は滅多に居ない)」 \*「ひめみや」は注に<以下「さましたるは難くや」まで、匂宮の心中の思い。『集成』は「浮舟に対する薫の気持との、基本的な相違を示すところ」。『完訳』は「女一の宮に浮舟を出仕させて、召人として情交を保とうと考える」と注す。>とある。女一の宮は六条院春の町の東の対に住んでいるかと思うが、二条院対の御方を女一の宮の女房に仕えさせれば好いと匂宮に勧めたのは明石中宮だった。匂宮としては常陸姫を何処かへ隠して忍び通いしたいという気持はあるのだろうが、実際にこのように小家で遊んでみれば、こんな気楽な生活が出来る立場では無いことに改めて気付くのが、30歳近い妻子持ちの分別ではありそうだ。いや、親王であってみれば、是が既に羽目を外し過ぎた振る舞いだろうか。 \*「いみじきものにしたまひてむ」は注に<主語は女一の宮。『集成』は「きっと秘蔵の女房になさるだろう」。『完訳』は「どんなにか大事に扱ってくださることだろう」と訳す。>とある。ただ、「たてまつる」は実際に<出仕させ申す>のだろうが、それは実質で<入社させる=社会勉強させる=行儀を

仕込んでもらう>のであり、しかも女一の宮は匂宮より四、五歳年上で33歳くらいになっていそうだから、預け甲斐があると思えたのだろう。匂宮の関心は、姫が姉宮の役に立つかどうかではなく、姉宮が姫を如何育ててくれるか、にあるはずだ。匂宮に姫を見下す意識は全くなさそうだが、客観情勢として、また事実上、宮家が大勢の使用人を従えて生活していることは、当然の発想基盤だ。

と見たまふ(と兵部卿は姫の姿を楽しそうに御覧になります)。かたはなるまで遊び戯れつつ暮らしたまふ(そして、大人気なく遊び戯れて一日暮らさなさいます)。忍びて率て隠してむことを、返す返すのたまふ(そして、姫を密かに京に連れて行き隠し暮らすという約束を何度も仰います)。「そのほど(そうするまでの間に)、かの人に見えたらば(大将には会うな)」と、いみじきことどもを誓はせたまへば(と無茶なことを誓わせ為さるので)、「いとわりなきこと(本当に勝手な)」と思ひて(とあって)、いらへもやらず、涙さへ落つるけしき(返事もできず涙を流す姫の姿を)、「さらに目の前にだに思ひ移らぬなめり(こうして私が目の前に居てさえ、大将への思いは変わらないらしい)」と胸痛う思さる(と兵部卿は心痛に思われなさいます)。怨みても泣きても(思うように会えないことを残念がるにしても嘆くにしても)、よろづのたまひ明かして(さんざん言い明かしなさって)、夜深く率て帰りたまふ(二日目の夜に兵部卿は対岸の山荘に姫を連れて帰りなさいます)。例の、抱きたまふ(この時もまた、姫を抱き運びなさいます)。

「いみじく思すめる人は(あなたが大事にお思いらしい人は)、かうは、よもあらじよ(こんなことは決してしないだろう)。見知りたまひたりや(私の気持ちがお分かりになるはずだ)」

とのたまへば(と兵部卿が仰ると)、げに、と思ひて、うなづきて居たる(確かに、とあって肯いている姫は)、いとらうたげなり(本当に可愛らしい)。右近、妻戸放ちて入れたてまつる(右近は妻戸を開いて御二人を部屋にお入れ申し上げます)。やがて(そのまま)、これより別れて出でたまふも(その戸口で別れてお帰りになるのも)、飽かずいみじと思さる(兵部卿は心残りで非常に辛くお思いになります)。

[第七段 匂宮、二条院に帰邸後、病に臥す]

かやうの帰さは(こういう場合のお帰りは)、なほ二条にぞおはします(やはり気楽な二条院になさいます)。いと悩ましうしたまひて(しかし匂宮はご帰宅後、無理が祟ったか、ひどく体調を崩しなさって)、物など絶えてきこしめさず(食事もさっぱり召し上がらず)、日を経て青み痩せたまひ(日が経つほど青ざめてお痩せなさり)、御けしきも変はるを(ご容態が悪くなるのを)、内裏にもいづくにも(御所でも諸侯に於かれても)、思ほし嘆くに(心配なさって)、いとどもの騒がしくて(見舞客がますます増えて)、御文だにこまかには書きたまはず(宇治への御手紙さえ情愛込めた長文はお書きになれません)。

かしこにも(宇治山荘に於いても)、かのさかしき乳母(あの口煩い乳母が)、娘の子産む所に出でたりける(娘の出産に見舞いに出ていたのが)、帰り来にければ(帰って来ていたので)、心やすくもえ見ず(右近は気楽に姫の御世話が出来ません)。かくあやしき住まひを(このような物寂しい姫の山荘暮らしを)、ただかの殿のもてなしたまはむさまをゆかしく待つことにて(ただ大将が京の新居にお連れ下さることを姫が心待ちにしているということで)、母君も思ひ慰めたるに(母

君も納得して)、忍びたるさまながらも(日陰者であっても)、近く渡してむことを思しなりにければ(常陸守邸からも近い所に姫を移そうと大将が御考えなのは)、いとめやすくうれしかるべきことに思ひて(とても安心で喜ぶべきことと思つて)、やうやう人求め(更に女房を捜し求め)、童のめやすきなど迎へておこせたまふ(童女の可愛らしい子を迎へて姫の許へ遣しなさいませう)。

わが心にも(姫自身も)、「それこそは(早く大将が用意なさる京の新居に)、あるべきことに(移りたいと)、初めより待ちわたれ(ずっと待つて来た)」とは思ひながら(とは思ひながら)、あながちなる人の御ことを思ひ出づるに(強引な兵部卿の情熱が思い出されて)、怨みたまひしさま(会えない嘆きを仰つていた姿や)、のたまひしことども(その言葉が)、面影につと添ひて(その面影と共に)、いささかまどろめば、夢に見えたまひつつ(少しまどろんでは夢に現れなさるので)、いとうたてあるまでおぼゆ(本当に困つてしまいます)。